

参加者、

秋元、浅田、市ノ川、石川、田中、鳥飼、  
中島、古川、安田、山岡、吉本、吉村、遊佐、  
お見送りー在原、

かわらばんー中島邦雄 挿絵ー小倉玲子

BMW RS Club

# かわらばん

クラブ創立21周年を迎えた一泊ツーリング特集号

Oct 7~8, 2000

浜名湖畔で薄紅葉を眺め海辺の  
優雅なホテルでくつろいだ旅

秋めいたかと思うとまた残暑がぶり返す数日を「秋暑し」と詠むそうですが、このところの暑さを思うと確かに成る程なという気分にさせられます。本来ならばとうに涼風の立つ頃なのに、今年ばかりは何時になんでも夏の後姿が振り返り、秋を語る紅葉、月、七草、秋鯖、彼岸ハゼそして秋味などの季語が、何か場違いにさえ聞こえる気がします。

「白玉の歯にしみとおる秋の夜、酒は静かに飲むべかりけり」という牧水の名句が影薄く響き、店の片隅で一人静かに物思いの酒を傾ける秋の風情が、どうかすると侘しく寂しげに見えてしまいます。

中国では「竜春分にして空に上り、秋分にして竜淵に沈む」とか言いますが、こう暑くては彼等も行き場が無い事でしょう。

長期予報では我々の走る土曜日は、東海地方にマークが付いて心配させられましたが、出発の2~3日前には晴天に変わりました。制限速度をキチンと守って走る、今回の参加メンバーに対する神様からの贈り物かも知れません。

三連休とあって朝早くから高速は大変な渋滞で、余裕を持って家を出たのに東名高速「海老名SA」には、定刻の八時ギリギリに滑り込みました。厚木の道路上で待っている鳥飼さんから「未だ出ませんか?」と度々無線が入りましたが、最後に環八の渋滞に巻き込まれたという山岡さんが駆け込んで、30分遅れで次の集合地「相良牧ノ原SA」へ向けて出発です。

ライダー・スーツに若者が乗るようなバイクで、在原さんがお見送りに来てくれました。どうもご苦労さんでした。

やや霞を被ったような感じの日でしたが、裾野をその霞に包まれた富士山がクッキリと我々の行く手に現れました。足柄の手前で浅田さんから無線が入ると同時に、我々はその横を走り去っていましたが「遊佐ちゃんのアクセル・ワイヤーがトラップだったので、メカの安田さんを捕まえて下さい」とのこと。しかし彼はとうに先に行ってしまいました。やがて興津のトンネルを抜けると、何度も走っても本当に心洗われるような由比から清水にかけての、あの見事な海が広がり始めます。直線路に「スピード注意」の看板があり、自分のメーターを見るとオット160キロを越えていました。静岡を過ぎ焼津からいつぞやトンネル内で大事故の有った、日本坂トンネルを抜けました。あの時はトンネル内での火災で多数の死者が出ましたが、走りながら何か有ったら、どっちの方に逃げたら良いかとフット思いました。「海老名SA」から164キロ先の「相良牧ノ原SA」に飛び込むと、先に着いたメンバーと一緒に、車で参加の石川さんが黄色のレガシーで来て居ました。安全運転で後から着いた私が1時間15分でしたから、先着組は大分飛ばしていた事が分かります。薄日が差して飛ばすと肌寒かった気温がグット上がり、半袖姿になるメンバーも居ました。心配していた遊佐ちゃんと浅田さんも少し遅れて到着し、安田さんが修理道具を出してアクセルを簡単に直し、さあ無事に再度の出発です。

高速に出るとすぐにお茶で名高い菊川、そして天竜川の長い橋を渡るともう其処は浜松です。やがてキラキラと日を受けて浜名湖の湖面が右手に現れました。当初は「浜松西」で高速を降りる予定でしたが「三ヶ日IC」で降りることに変更です。此処まで家を出てから268キロ、時刻は11時25分でした。高速出口でガス補給をしたら17リットル入りました。石川さんの先導で館山寺方面に向かい、湖の周囲をグルグルと回る感じで走ると、さすがにウナギ屋の看板が目立ちます。岸辺を走っている為か、なんとなく濁んだ水の色が気になりました。やがて館山寺の温泉街を抜けて、突き当たりの神社を右にゲット上ると、急に目の前に見事な湖面が現れ、湖面の上をゴンドラが上り下りしていました。ちょうど昼飯時間でしたが大きな店で、湖の見える処で少々生ビールを楽しみながら、各自に饅頭やら塩焼定食を食べました。浜名湖は海の水も入る汽水域で、海水と淡水の魚が捕れます。今はハゼのシーズンのせいかビールの突き出しにハゼの甘露煮が出てきました。口ハですから文句も言えませんが、食べ慣れた東京の甘露煮に比べて味が濃すぎました。食事を終えて外に出ると、湖岸ではもう幾らか木々の葉が色づき、暑いとは言ってもう十月ですから、季節は確実に秋から冬に向かっているのでしょう。

少し早いが宿舎へ向かうことになりました。「浜松西IC」から再び東名高速に乗り、少し先の「音羽蒲郡IC」へと一飛びです。高速を降りるとやや蒸し暑く、二次会用の酒やらツマミを買いにスーパー・マーケットに入ったら、其処の涼しさにホットさせられました。随分たくさん買いましたが、多めの方が気分的に心地良いとか。確かに我々飲む者にとっては、そう言えるかも知れません。そうそう東京では見たことも無い魚が並んでいました。短い有料道路を走り海の香りがしてくると、今日の宿舎の

「蒲郡プリンス・ホテル」に到着しました。元々は誰かの屋敷跡かと思われる古い三階建で、些か古びていましたが格調高い建物です。手入れの行き届いた庭園には沢山の錦鯉が悠然と泳ぎ、年代を経たと思われる茶室が建っていました。目の前には穏やかに海が広がり、遥か彼方には渥美半島が霞んで見えました。すぐ目の前の浜から真っすぐに橋が延び、竹島と呼ばれる島とを結んでいましたが、そんな中を空を染めて日が沈んでゆきました。

秋元さんがバイクでそして吉村さんが新幹線で現地に駆けつけ、やや少な目ですが今回の参加者13人が揃いました。